漫筆漫歩

「右に倣え」は困りもの

村上浩一
数理物質科学研究科教授

スーパーや八百屋に並ぶ日本の農作物の種類は豊かである。しかし、それぞれに地方色や個性がなくなっている。子供のころに食べた青臭いトマトが手に入らない。曲がったキュウリもない。それが、アメリカやヨーロッパでは市場やスーパーに行けばそのようなトマトもキュウリもあるし、ブドウでも、じゃがいもでも沢山の種類にお目にかかることができる。どうも日本ではある種のものが経済的にいい、健康にいい、美味しいとなると、古くからのものを簡単に棄てて右に倣えとなる。そのために数年もすればその種だけになって、数十年後には古くからあった品種の苗も種も手に入らなくなると言われている。

街並みも同じだ。ヨーロッパでは良いと信ずる文化や環境をできるだけ継承するよう努めている。少なくとも、自分が鬼籍に入るまでは祖父母の生きた環境が残っていてほしい。そうすると、自分の孫子くらいまでの5代、約100年はある地域で街並みの改造を行っても、大きく変らない。一部はその後の 100 年を見据えて計画的に大胆に変えることもあるだろうが、それはあくまで一部に止まる。こういうやり方がヨーロッパ流であると思う。これと比べて、日本では明治以来、その時代の勝ちパターンの輸入癖が抜けずに、世の中の流行に従うのが身上になっているような気がする。

なぜなのだろう。流行に敏感な人々が主流であること、人々がブランド志向で、しかも社会全体が強いもの、お上に弱いことなども一因かも知れない。しかし、最も大きな要因は、100 年、200 年の時を掛けてものごとを作った経験に乏しいことではなかろうか。例えば、ケルンの大聖堂。高さ 157 メートルの天に向かう世界屈指のゴシック建築であるが、1248 年（鎌倉時代）に起工され、1880 年（明治時代）に完成している。約 600 年もかけて、造り上げられたという

気の遠くなるような話である。このようなものが、翻ってわが国に一つでもあるだろうか？答えはノーである。今の科学や技術も一部の先端分野では欧米と対等に競争しているものの、その基礎はやはり借り物がほとんどで、真理の探求という精神面での希求や問題発掘が、はたして自分達から湧き出てきたものかどうか疑問であるような気がしてきた。やはり、伝統や歴史から必然的に出てくる精神というようなものが定着するには時間がかかるのだ、ということを肝に銘じておくべきだと思う。

昨年の冬（2006年の2月頃）につくばの東大通りと西大通にそれぞれ約2.5kmも続くケヤキ並木とその他の小さな通りのケヤキ並木が、突然にも無残な剪定をされてしまった。約30年もかけて成長した素晴らしいケヤキ並木の木々である。「つくば市の樹」でもある。剪定後に春を迎え、5月に入ると生命力のあるケヤキが、残された主木と太枝のいたるところから緑を吹き出していた。一瞬、シュロの木々かと見紛うほどであり、まるで南国にいるかのような異様な感じがする。つくば市役所に問いあわせると、県の道路を管理する土浦土木事務所がやったとのこと。食堂やラウンジなどで同僚にその話をするが、私と同じように憤慨してくれるのは、庭にケヤキを植えている人と日ごろ批判的精神のある少数の人だけである。草花や樹木好きの人でも、維持管理費や落ち葉の問題など街路樹の問題点をよく知っているのであろう、あまりレスポンスがよくない。不思議だ。一応、土木事務所にどのくらいで回復するのかを問い合わせると、「5年経てば大分元に戻る」という。「それならばどうして一本置きにま



ず半分だけを剪定し、5 年後に残り半分を剪定しないのか、そうすれば景観を余り崩さずに済んだはずだが、」と抗議だけはしておいた。お役所仕事というのはそこまで考慮しない。

私は関西出身で、むかし関東にやって来たときにケヤキの素晴らしさにほれぼれしたものだった。葉っぱをつけている時期は言うに及ばず、落葉しても樹のシルエットが何とも言えないほど美しい。近年、落ち葉の問題で農家でさえケヤキを切り倒しているのに、私は自宅の庭にケヤキを 2 本も植えるという愚行？をしたくらいであった。その間に、つくばのケヤキがすべてといっていいほど、よい形に大きく成長しており、自分の家のケヤキが情けないくらいにみすぼらしいと思う 10 年ほどの年月を経験している。そのためかつくばの素晴らしいケヤキ並木への思い入れがさらに強くなったのだろうと思う。

この突然の剪定という暴挙と同じように、わが大学ではアスベスト工事の予算が平成 18 年度に幸運にも予想以上に付いたとのことで、本年度中に研究室、講義・実験室、階段など天井コンクリートにアスベスト混入物を吹き付けた箇所をすべて取り除こうと計画し、実行している。現在、全く危険はないのにこれを短期に一律に実行すると、アスベスト飛散や工事後のアスベスト汚染問題が浮上するような事故に繋がりはしないかと素人ながら心配をする。特別な場所については長期計画を立てて、学生の教育、研究指導、ならびに教員の研究の妨げにならぬようにアスベスト工事を行うの



が本来の筋であろう。しかし、単年度予算のためそんなことは考慮せず、大学執行部と施設部は画一的に工事を進めている。長年研究現場と繋がっていた役職の人に、「どうしても困る部屋もあり、消費税分くらいは特別に何とか長期計画で・・」と訴えたが、そういう人まで右に倣えである。「小忍ばざれば則ち大謀を乱る」とでも思っているのだろうか、それならいい。しかし、大学の対応も土木事務所と同じくどうしてかお役所的である。日本人の習性かもしれない。

研究でさえ流行を追いかける人が日本には多い。研究者には、これだけは自分で土俵をつくるという気概で頑張るべき時期があるはずだ。しかし、最近、独自のやり方だが実用化を謳わない研究は科学研究費補助金の申請も通らないことが多いようだ。ブランドと流行が学会でも大きな顔をして通っている。そのような科研費に通った人々が審査員になるようになってきたため、ますます流行でない研究は通らなくなる。これでは世界から尊敬されるようなオリジナリティーのある研究と日々の蓄積効果が将来出なくなるのではないかと心配になる。

ストップ。何ともスケールの小さなネガティブで愚痴っぽい話になってしまった。小言幸兵衛になったような気分だ。しかし、「筑波大学だけが、日本だけが問題で、欧米が模範だ」などと決して思っているわけではない。この辺で、心の中の錬金術を使ってポジティブな志向に変えていき、微力ながら筑波大学がやるべきは何なのだろうと自問してみたい。

10年、20年先になってみれば、「これからの大学とは？　何を教育すべきか？」という問いかけと実践とは、教育・研究・資金で国内他大学とゼロサム的競争を今するよりも、もっと大切かもしれない。それこそ世界レベルで。大学の特長は、企業とは違い、文系と理系の知的集団共同体であることだ。これをうまく融合的に生かして、現在および将来の重要課題を的確に見出し果敢に挑戦し、長期的な視野で人々のためになる人材の育成を行い、教育研究等の活動成果を地元や世界に発信し還元するのが主要大学の使命と考えたい。

そこで、まず読み・書き・そろばんに相当する現代版の基礎となる教育（リベラル・アーツ）が何であるかを問い直すことが重要かもしれない。リベラル・アーツには自由学芸という訳があり、自由人の教養として、実利や職業、専門性を志向する学問と対立するものとされている。しかし、これだけではわかりにくい。「自由七科」と翻訳される場合もあるらしい。何から自由なのか。それは、ギリシャ、ローマでは当たり前に存在した多くの奴隷や過酷な肉体労

働をせざるを得なかった人々の営みから「自由になること」であった。そして、神に近づき、神が創った自然を理解するためのアート、つまり「技（技術）」を学ぶことから、リベラル・アーツが出てきた。

まず、神に近づくには、聖書を正しく人々にわかるように記述する必要がある。それには共通語たるラテン語の「文法」を学ばねばならない。さらに論理が正しくなければならないので、「論理学」を学ぶ。それを人々によく伝えるには、わかりやすく、何が大切かを強調できる「レトリック」が大切になる。これが 3 科であるとのこと。残る 4 科は神が創った自然を理解するためのアーツ、或いは一歩でも神に近づくためのアーツで、それが天文学、算術、幾何学、音楽であったということだ。欧米の大学では昔からこのような理由でリベラル・アーツが大学教育で第一に大切とされてきた。学問の根の深くにこういう強い希求があったし、今もあるのだろう。

一方、わが国では明治政府の実学志向によりかなりの表層部分は効率よく欧米に追いつくことができた。大成功であった。しかし、目に見えぬ根の部分、つまり大学の理念やその精神と大学の歴史についての理解を避けてきたと思われる。世界の先進国における大学の発展は 19 世紀から現在までも国により大いに様相が異なっているし、いまや日本と同じく問題、課題山積の状態らしい。技術爆発、人間欲望爆発が起こりグローバルな経済競争が激化している今、深い根となり自由に飛翔できる翼となり得るリベラル・アーツとはどのような教育であるのが望ましいのか、小中高の教育と関連して、主要大学が真剣に考える必要がありそうだ。

漫筆漫歩。私ひとりの思考だけではこれ以上の展開や具体的な行動提起は難しいので、ここで終わりにしたい。人間社会の難しい課題への挑戦にはこれからは文系と理系の知的対話が絶対に必要である。自由に話し合える場がひょっとしたらこの「筑波フォーラム」なのかもしれないと、この随想を書いていて思うようになった。さらに、筑波研究学園都市全体の共通の対話の場として「筑波フォーラム」を使えばもっとおもしろいと気づいた。とにかく「右に倣え」をしない人々として、我々には立派な先輩がいる。古くは漱石や南方熊楠、最近では、日本の誇りとも思える中村哲さん、文武（理科と文科系）両道で売れっ子、それでいて人間としての想いも高い茂木健一郎、少し前の時代小説家の藤沢周平。わが国の大学者として誇りうる湯川さんや朝永さんもそうだろう。空しくなることがあっても、こういう人々を時々思い出して元気を出したい。

（むらかみ　こういち／半導体工学、ナノサイエンス）